

「子ども防災力トレーニングキャンプ」 ～判断力、行動力、思いやりを身につける～

平成 25 年 12 月 21 日（土）～23 日（月）2 泊 3 日



I 事業の背景（必要性）

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、改めて子どもたちへの防災教育の必要性が提唱されており、学校以外で被災することを想定した避難訓練も充実させる必要がある。

そこで、青少年教育施設の特徴を活かし、災害での避難を想定した体験活動プログラムや避難後の生活を想定した避難所生活体験を取り入れた「体験型防災教育プログラム」の開発・充実を目標に、本事業を実施した。

II 事業の概要

1. 趣 旨

子どもたちに災害から身を守る力を身につけることが喫緊の課題となっていることから、講話や自ら考える場面を設定した実習等を通じて、防災に関する基本的な知識や技術を身につけるとともに、適切な避難行動がとれるように判断力や行動力を高め、また集団生活を通して周囲を思いやるなど、災害に対応する強い意志と優しい気持ちを育む。

2. 参加者

（1）対象・募集人数

本事業の趣旨・内容に関心と意欲のある小学校 4 年生～6 年生 40 名

（2）参加状況 参加児童数 39 名

<学年別参加児童数>

学年	男子	女子	合計
4 年生	4	5	9
5 年生	8	7	15
6 年生	7	8	15
合 計	19	20	39

<地域別参加児童数>

地域	男子	女子	合計
御殿場市	3	5	8
沼津市	12	13	25
三島市	1	1	2
静岡市	3	0	3
東京都	0	1	1

（3）広報の方法

- ① 募集チラシを作成（業者印刷）
- ② 御殿場市・沼津市の小学校 4 年生～6 年生の全児童に配付
- ③ 静岡県裾野市・三島市・小山町・長泉町・清水町と神奈川県秦野市・南足柄市・山北町・松田町・箱根町と山梨県富士吉田市・都留市・山中湖村・富士河口湖町・忍野村の各小学校に 15 枚ずつ配付
- ④ 静岡県内の各市町教育委員会、山梨県と神奈川県の近隣教育委員会に広報を依頼
- ⑤ HP に掲載
- ⑥ 静岡県内の地元新聞社に掲載依頼

3. 日 程

21日 (土)	10:15	11:00	12:00	13:00	14:00	14:30	16:30	17:00	19:30	20:50
	始めの会 オリエンテーション	交流ゲーム	昼食	災害と避難		避難行動トレーニング	夕食	入浴	ストレスの低減方法	避難所生活体験
22日 (日)	9:00	10:00	12:00	16:00	18:00					
	朝食	防災ラリー				振り返り	夕食	避難所生活体験		
23日 (月)	7:30	9:00	10:00	11:00	11:30					
	朝食	片付け	グループワーク	まとめ発表会	閉講式	解散				

4. 内 容（活動の様子）

(1) 「災害と避難」(講話) 講師：宮城県南三陸町教育委員会 芳賀 勝清 氏

東日本大震災では、どのような災害が起きたのか、また、どのように避難したのかをスライドによる映像や、聞くことにより、参加者の防災に関する意識を高めた。

(2) 「避難行動トレーニング」(講義・演習) 講師：静岡県ふじのくに防災士 川口 聡

日常生活における様々な場面での避難の仕方や、避難する時に気をつけることについて考えた。

- ・学校での避難訓練を思い出そう
- ・伝言ゲーム
- ・家の中（リビングや自分の部屋）での危険箇所を見つけ出そう
- ・非常時に持ち出す物を考えよう
- ・避難するときに安全な道を探そう

(3) 「ストレスの低減方法」(講話・実習) 講師：臨床心理士 村上 久美子 氏

日常生活のどのような場面でストレスがたまり、ストレスをどのように発散しているかを各自が振り返った。

その後、ストレスを低減する方法として、リラクセス法があることが示され、リラクセスするための簡単なストレッチや体操などを行った。

(4) 判断力、行動力を養う「防災ラリー」講師：国立中央青少年交流の家 職員

ラリーの各ポイントには、煙ハウス体験やダンボールを使った避難所作り、火おこしが必要な昼食作りなど、工夫と協力が必要な課題を設けた。制限時間内で多くの点数を獲得するために、グループがどのポイントをまわるかを相談して決定することや、各ポイントの課題を話し合っ解決する過程で、判断力と行動力が試される機会が多く設定されているという特徴がある。ラリー後には、グループごとに振り返りを行い、ラリーを通して学んだことで、災害時の避難で大切だと思ふことを考えて、発表した。

※ 煙ハウスの体験については、御殿場市・小山町広域行政組合 消防本部に協力を得た。

※ ダンボールを使った避難所作りは、宮城県南三陸町教育委員会 芳賀勝清氏に協力を得た。

(5) 「避難所生活体験」(実習) 講師：国立中央青少年交流の家 職員

避難所での生活はどのようなものかを疑似体験した。初日は、仕切りなどプライベート空間が確保出来ない状態で就寝し、そこで体験した事を活かした就寝スペース作りを防災ラリーで行い、その違いを体験した。

- ・ダンボールとレジャーマットを使用しての間仕切り、空間作り
- ・気温の低い中、毛布や寝袋を使用しての就寝
- ・非常食での食事

※ 非常食は、御殿場市玉穂支所・印野支所と大塚製菓株式会社より提供を受けた。

(6) 「避難所でできること～助けられる存在から助ける存在へ～」

講師：国立中央青少年交流の家 職員

2泊3日の研修や体験を振り返り、自分たちが避難所でできることについてグループで話し合い、全体で意見を発表した。

(7) まとめ(個人・グループ活動)

個人でキャンプを振り返り、ワークシートに記入した後、体験したことや学んだことを今後の生活に活かすために、「明日から頑張る目標」というテーマで一人一つ考え、輪になって発表した。

〈主な目標〉

- ・「皆を笑顔にする」…いざ災害に遭ったら、たくさんの人が悲しい思いをする。そんなときに笑顔で勇気や希望を与えられるようにしたい。
- ・「リラックスの方法を家族に教えたい」…ストレスがたまった時に、少しでもストレスが低減できるように、キャンプで学んだリラックス法を家族に伝えたい。
- ・「困っている人がいたら助けたい」…災害時には避難所などで困っている人がいると思うが、日常でも困っている人がいたら、声を掛けて、何か手助けが出来る人になりたい。
- ・「自分に出来ることを考え、実行する」…小学生の自分でも、出来ることを見つけて人の役に立ちたい。今回のキャンプの経験を生かしたい。

5. 評価

(1) 評価の方法(アンケート調査の実施)

① 参加児童に対して

ア. 「キャンプはためになったか、どのようなことがためになったか」や「自分が頑張ったこと、できるようになったこと、考えたこと」について、アンケート調査を実施した。

イ. 国立青少年教育振興機構が開発した、「生きる力」の測定・分析ツール「IKR評定用紙(簡易版)」を用いて調査をした。

② 保護者に対して

「キャンプの印象について」、「お子さんが自信をつけた、成長したと思うこと」についてアンケート調査を実施した。参加した子どもたちに質問紙と封筒を渡し、後日郵送していただいた。

(2) 結果 (資料)

① 児童アンケートの結果

- ・ 39 人中 31 人の児童がキャンプは「とてもためになった」、8 人が「ためになった」と回答した。
- ・ 39 人全員がどの項目についても「とてもためになった」、「ためになった」と回答しており、特に印象に残ったこととしては「地震や津波の避難体験の話聞いたこと」、「防災ラリーをやってみんなで活動したこと」、「新しく出会った人と、友だちになれ、協力出来たこと」などが上げられている。

② 児童 IKR 調査の結果

「生きる力」及び生きる力を構成する上位概念である「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の全てにおいて、変容が見られた。「生きる力」は 10.3 ポイントの向上がみられた。

③ 保護者アンケートの感想

- ・ 自宅の家具や食器の配置などに気を配るようになり、防災意識の高まりを感じています。
- ・ 初めて出会った友達と仲良く過ごせたことで、協調性が伸びたのだと嬉しく思っています。
- ・ 被災地の映像・話、防災ラリー、避難所生活体験など、プログラムの全てが勉強になったようで、帰宅後、家族で防災について考えました。
- ・ 目をキラキラさせて帰ってきました。帰宅後、キャンプ中の出来事をたくさん話してくれ、ストレスの低減法について教えてくれました。子どもがたくましくなって帰ってきたように思い、嬉しく思います。
- ・ キャンプ後、子どもの口から「ありがとう」という言葉が自然と出てきます。

III 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

(1) 中央防災会議（平成 24 年 3 月）では防災教育の目的を『『目の前の現実』から確かな情報を獲得し、自ら優先順位を判断し行動できる自立した人間』の育成としている。当交流の家では、それを防災力を備えた人間と捉え、防災力を地震の前、発生中と直後・発生後の三つの時間軸に分け、知識・技術・態度の側面から以下のように整理した。

	地震の発生 前	地震の発生	地震の発生 後
知識	<ul style="list-style-type: none">・ 地震が起こるメカニズム・ 地震によって起こる被害・ 日頃から備えるコトとモノ	<ul style="list-style-type: none">・ 身を守る方法・ 避難の方法	<ul style="list-style-type: none">・ 地震が起こったときの人間の心の動き（心理）・ 情報収集の方法・ ストレスに対処する方法
技術	<ul style="list-style-type: none">・ 危険を予測し回避する行動	<ul style="list-style-type: none">・ とっさに判断し即座に行動する力	<ul style="list-style-type: none">・ 状況に応じた判断力と行動力・ 困難な状況の中で生活する技術
態度	<ul style="list-style-type: none">・ 互いに助け合う思いやりと態度	<ul style="list-style-type: none">・ 最悪の事態を想定し冷静に行動する態度	<ul style="list-style-type: none">・ 互いに助け合う思いやりと態度・ 冷静な態度・ 生き抜くという強い意志

- (2) 上記の防災力のうち、今回は「防災に関する基本的な知識や技術」と「適切な避難行動がとれる判断力や行動力」「互いに助け合う思いやり」を習得できるように、プログラムを企画した。
- (3) 小学生にとってはプログラム内容が精神・肉体的に負荷が高いことから、募集に際しては、企画意図を理解した上での参加を募ることとした。
- (4) 災害発生後には避難所での生活も予想されるので、避難所生活を疑似体験するプログラムを企画した。
- (5) 実際に震災を体験した宮城県南三陸町の職員の方を講師に招き、講義・実習を企画した。
- (6) 地震や避難所での不自由な生活では、様々なことがストレスになることから、ストレスの低減方法について、臨床心理士の方を講師に招き、講義・実習を企画した。
- (7) 1日目のテーマは「地震に備える」。2日目のテーマは「地震や地震後の生活を体験する」。3日目が「学んだことをまとめる」とキャンプにストーリー性を持たせた。また、1日目に学んだことが2日目の生活や体験に活かされるように防災ラリーの内容を踏まえて、プログラムを作成した。

2. 運営のポイント

- (1) 子どもたちのグループ編成については、それぞれの活動が行いやすい各学年と男女のバランスが均等になるように編成した。
- (2) ボランティアスタッフは、子どもたちの話し合いや、グループ活動が円滑に進められるように、また1人に負担がかかりすぎないように各グループに2人を配置した。(防災ラリー実施時には、防災ラリーの各ポイントにボランティアを配置するため、グループにボランティアは1人となる。)
- (3) 防災をメインとしたキャンプではあるが、生活習慣が防災力につながることから、そのようなことも意識し、言葉かけや指導を行った。
- (4) 毎晩、班別での話し合いを行い、「今日の反省」から「明日の目標」を明確にし、翌日の活動への意欲付けを行った。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 今回の防災キャンプで疑似体験した煙ハウスや避難所生活は、これからの自分達の生活に現実として起こりうる事態であることを認識するとともに、防災への関心を高めることができた。
- ② 平成23年度に開発した「防災ラリー」を、災害発生時に必要な判断力や行動力を養うための視点を加え発展させることができた。防災ラリー実施後のふりかえりで、子どもたちからは「行動力・判断力・思いやりを身につけることが大切だと実感した」「自分勝手な行動は集団で行動する時によくない」「普段から物を大切にすることが大事」「ラリーを回る前に作戦会議をすることで、時間を無駄にせず回れた」「教え合うことで課題がクリアできた」「無駄がないように考えてから行動することが大切」などの意見が出た。これは防災ラリーを通して、避難や避難所生活の時に必要な判断力・行動力の一部を体験的に学んだ成果といえる。
- ③ 日常生活とは全く違う環境のなかで寝食を共にしたこと、常にグループで話し合いなどの活動を進めたことで、参加した子どもたち同士のコミュニケーション力や、人間関係づくりの技能を高めることができた。

- ④ まとめで、これからの日常生活の目標を発表し「家族を守りたい」「リラックスの方法を家族に教えたい」「困っている人がいたら助けたい」などの意見が出ており、キャンプ後にも継続的に防災を考える意識付けができた。
- ⑤ 本事業をプログラム内容に修正を加えながら3年間継続してきたことで、年々充実したキャンプにすることができた。特に防災ラリーの内容の充実、ボランティアスタッフの子どもたちとの関わり方については、反省会でも「年々充実してきている」という意見が多数出された。

(2) 課題

- ① 防災ラリーは回るポイントが限られていることから、一度に実施できる人数が1グループ6~7人の最大40人程度であることが分かった。今後、研修支援プログラム等では、集団にあった実施方法を提示していく必要がある。
- ② 参加した小学生と生活を共にするなかで気になったこととして、「靴の踵を踏む・揃えられない」「挨拶が出来ない」「人の話を聞く際に机に肘をついて聞いている」「極端な偏食」など、基本的な生活習慣が身につけていない子どもも多く見られる。こうした日常の基本的な生活習慣の見直しがいざというときの「防災力」にもつながることから、今後、基本的な生活習慣を身につけることの重要性についても、周知していく取り組みが必要である。
- ③ 平成23年度から25年度は小学生を対象として実施をしてきたが、避難行動のパターンや、避難所での生活の知恵や知識の伝達を行う場合に、中学生や高校生を対象にしたプログラム開発も検討の余地がある。
- ④ 今後は、防災ラリーを中心とした当所のプログラムを、学校や地域に発信し、地域性や実情を考慮した防災教育の充実につなげられるよう、さらに各機関・地域と連携を図っていく必要がある。

4. 参考文献

- (1) 「生死を分ける 災害とつさの判断力」 三雲大 榎出版
- (2) 「みんなの防災ハンドブック」 草野かおる ディスカヴァー・トゥエンティワン
- (3) 「人が死なない防災」 片田敏孝 集英社新書
- (4) 「みんなのPA系ゲーム」 諸澄敏之 杏林書院
- (5) 「72時間生きぬくための101の方法」 夏緑 童心社

担当：吉野達也 望月奏 長谷川大地